

たはら歴史探訪クラブ

その7

百々神社(一) 華麗なる天井画

平成6年の春先、百々区の方から、百々神社を見てほしいという依頼が博物館にありました。当地に出かけ調査をしたところ、思わずはっと息をのみました。拝殿の天井に実に見事な絵があるではありませんか。うわさで天井画の存在は知っていたものの、これほどのものとは。しばらく時がたつのも忘れて見入ってしまった。

拝殿は、3間(5.4m)×2間半(4.55m)の大きさです。天井画のモチーフはすべて花で、50cm四方の杉板に、胡粉(貝を砕いた白い絵の具)と岩絵の具によって描かれており、全部で63面もあります。雨漏りや湿気、140年の時間の経過などで絵の具は所々はがれ落ち、変色していますが、当時の豪華な様子を想像するには十分です。

これらの絵の作者は稲田文笠、鈴木拳山、大河戸晩翠、長尾華陽ら12人で、幕末から明治・大正にかけて、東三河の画壇を代表する人たちがかりです。そのほとんど

が稲田文笠の門人でした。文笠は現在の豊橋で生まれ、渡邊崋山の絵の先生でもある谷文晁に教えを受けています。崋山とは同門で、文晁から「文」の字を許されるほど、期待されていた画家です。また文笠は豊橋市周辺を領有していた吉田藩の御用絵師ともなっていました。百々神社の天井画では、文笠の絵が中央に配置され、また点数も多いことから、文笠が中心となって制作されたと思われます。この拝殿は、文久元年(1861年)9月に、百々村庄屋の清水家が建て替えを行ったことがわかっています。絵に記されている制作年も同じで、拝殿の建て替えにあわせて、この天井画が描かれたことがわかります。

ここで、少し不思議に思いませんか。田原の神社に隣の藩の絵師がかかわるなんて。それもそのはず、江戸時代の百々は田原藩ではなく、吉田藩領だったのです。また、表浜でとれる海の資源は、藩の財政にとって重要な位置を占めており、清水家も当時隆盛を誇っていました。吉田藩の絵師がこの神社の天井画制作に携わったのも、このような事情によると理解できます。

百々神社拝殿は、平成7年に建て直されましたが、その天井には以前と同じように天井画が戻されています。そしてそれは、町内に残る江戸時代の天井画としてたいへん貴重なものと言えます。



▽田原町博物館 ☎ 22局 1720

広報たはらは、森林資源保護のため再生紙(古紙100%)を使用しています。

今月の表紙

「コスモス」という言葉にはギリシア語で「調和・秩序」などの意味があります。その反義語が「カオス(混沌)」です。「コスモスⅡ宇宙」と言われるのは、宇宙が調和のとれた空間であるからです。

何が狂っているとしか言いようのない事件を目の当たりにして、私たちの価値観は大きく揺れています。人間社会は、このままカオスに支配されてしまうのでしょうか。調和という名の付いた花は黙して何も語ってくれません。

戦うべき相手は人間なのでしょか? それとも思想なのでしょうか? いずれにしても、私たちは冷静になつて、コスモスのように控えめで美しく生きる必要があります。

【人口と世帯数】

総人口	36,906人	
男性	18,859人	
女性	18,047人	
世帯数	11,498世帯	
出生	40人	死亡 21人
転入	123人	転出 91人
増減	51人	

(平成13年9月1日現在・増減は8月中)

【行政面積】 82.86 km²

(平成11年10月1日現在・国土地理院調べ)